



Title	1964年東京オリンピック選手団公式服装の服飾史的位 置をめぐる研究 : アイビーブームとの関係を中心に
Author(s)	安城, 寿子
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 32-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67719
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1964年東京オリンピック選手団公式服装の服飾史的位置をめぐる研究 — アイビーブームとの関係を中心に

安城寿子／お茶の水女子大学ほか非常勤講師

1. はじめに

発表者は、第56回意匠学会大会シンポジウム（2014年7月開催）における口頭発表以来、ジャーナリスティックな媒体への寄稿等も含めて、1964年の東京オリンピックの開会式で日本選手団が着用した赤と白のユニフォーム（以下、正式名称である「選手団公式服装」と言う）をデザインしたのが従来通説となっていたメンズアパレルブランド「VAN」の創業者である石津謙介ではなく東京神田で洋服店を営んでいた望月靖之（1910-2003）であるということの詳細を明らかにしてきた。本発表は、これまでの研究成果を踏まえて、1960年代前半におけるアイビーブームとの関係を中心に、東京オリンピックの選手団公式服装が服飾史に占める位置について二つの報告を行おうとするものである。

2. アイビーブームと従来通説について

本発表の問題意識を明らかにするため、以下のことを確認しておかなければならない。

まず、アイビーブームという現象についてだが、1960年代前半の日本では、若年の男性を中心に、アイビールック（ハーバードをはじめとするアメリカ北東部の名門8大学の連盟である「アイビーリーグ」の学生や卒業生がいかに好みそうな正統派の服装のこと）が流行を見せた。『男子専科』『メンズクラブ』『平凡パンチ』といった雑誌、それから、先述のメンズアパレルブランド「VAN」がこの流行を牽引し、「アイビールック」のテイストとともに、それまでの日本ではあまり馴染みのなかった様々な洋服のアイテム

（ダッフルコート、アーガイルセーター、ボタンドウンシャツなど）を紹介したと言われる。そこで既製のブランドである「VAN」が重要な役割を果たしたことは特筆すべきである。

さて、1964年の東京オリンピックの選手団公式服装をめぐる従来通説では、石津謙介がそれをデザインしたとされていただけに、あたかもこのユニフォームがアイビーブームを象徴するものであるかのように語られることがあった。それが別人によるデザインであることが明らかになった以上、東京オリンピックの選手団公式服装とアイビーブームの関係についても同時代資料の検証に基づく再検討が必要というのが本発表の問題意識である。

3. 報告①：「注文服 vs 既製服」という図式の中で

石津謙介は、1964年6月7日の『読売新聞』に掲載された「貧乏人の注文服」と題する記事において、東京オリンピックの選手団公式服装が注文服であることを痛烈に批判していた。「入念な仕立てであるということは、この一着を長く着よう、古くなれば裏返しをして着る。あげくの果ては、子供のものにも改造して、孫子の代まで活用しようとする日本の貧困性から生まれた、衣服に対する考え方にほかならぬ」などとほとんど言いがかりに近い内容だが、アイビーブームの中で誕生した別のメンズアパレルブランド「JAX」のデザイナーである伊藤紫朗もまた、同年9月14日号の『平凡パンチ』において同様の批判を展開している。さらに、石津の右腕とし

て知られたくろすとしゆきは、オリンピック特集が組まれた1963年5月増刊号の『デザイン』において、「仮縫をしようがしまいが、仕立てが良いか悪いかなんか洋服屋以外の人にわかるもんじゃない」と述べ、翌年に控えた東京オリンピックの選手団公式服装を既製服として製作すべきことを訴えている。

一方、1964年9月号の『日織ジャーナル』には、先述の石津の批判を受けた注文服業者による反論が掲載されており、「既製服万能」という「米国型」の考え方自体が間違っているという真っ向から対立する主張が見られる。

以上のように、同時代資料の検証からは、1964年の東京オリンピックの選手団公式服装をめぐる、当時、注文服業者とアイビーブームを牽引した既製服業者との間で明確な対立が起こっていたということが明らかになった。このことを踏まえるなら、東京オリンピックの選手団公式服装がアイビーブームを象徴するものであるかのように語ってきた従来の通説は次のように書き換えられなければならない。東京オリンピックの選手団公式服装は、日本人の衣生活の中心が注文服から既製服へと移行する過渡期にあたる1960年代前半に立ち現れたアイビーブームという現象の中で、注文服業者と既製服業者の対立を表面化させる一つの契機となり、石津謙介をはじめとするメンズアパレルブランドの関係者は、選手団公式服装の仕事が注文服業者によって独占されていることを快く思っていなかった。資料の中で明言されてはいないものの、彼らは、若者たちの間でカリスマ的な人気を集めて注目されていた存在であっただけに、その仕事が自分たちに回ってきてもよさそうなものだと忸怩たる思いを抱えていたのかもしれない。

4. 報告②：もう一つの役割

しかし、1964年の東京オリンピックの選手団公式服装、とりわけ、その上衣である赤いブレザーは、当時、もう一つ別の役割を果たしてもいた。アイビーブームの中で、それまであまり知られていなかった洋服のアイテムが次々に紹介されていったということは既に述べた通りだが、『男子専科』をはじめとするファッション雑誌は、東京オリンピックの開催が近づくにつれて、しばしば、ブレザーというアイテムを取り上げるようになっていく。そこでは、日本選手団の赤いブレザーが肯定的に語られることもあり、アイビーブームを牽引したメンズアパレルブランドの関係者による批判的言説とは異なるメッセージが発信されている。すなわち、ブレザーもまた、アイビーブームの中で受容が促されたアイテムの一つで、ブレザー特集の記事には、「VAN」や「JAX」のブレザー（既製品）も掲載されている。その受容を促すメッセージにおいて、旬の話題として繰り返し言及されているのが他ならぬ日本選手団のあの赤いブレザーなのである。



（『男子専科』1964年7月号より）